

李セボン著

『自由』を求めた儒者 ——中村正直の理想と現実』

(中央公論新社・二〇二〇年)

菅原 光

「儒教的教養が明治の中期以後、急激にうすれてゆき、しかも天命や天道にかわる普遍主義的観念が根付かなかったことが、伝統的な神国思想のウルトラ化を容易にした一つの思想的要因のように思われる」(丸山眞男『開国』、『丸山眞男集』第八卷、六

四頁)。儒教の重要概念であった「天」のような、権力に対する抑制機能を持ち得る普遍的な観念が大日本帝国には存在しなかったとする分析である。「天」という観念が現実にはどれほどの意味を持ち得たかはともかくとして、福澤諭吉が「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」と述べ、人権がまさに「天賦」のものとして表現されていた頃までは、少なくとも「天」は頻繁に言及される語であった。しかし、当の福澤自身、次第に「天」に言及しなくなり、天賦人権論を鼓吹することともなくなっていた。その後、「天」は思想を語る語としては死語化して現在に至っている。他方、李セボン『自由』を

求めた儒者——中村正直の理想と現実』が考察対象として定める中村正直は、福澤とは異なり、終生「天」にこだわりを持ち続けた思想家であった。中村は、昌平坂学問所における御儒者として、同時代において最も深く儒学を究めたと言える人物でありながら、同時にキリスト教に対する深い共感をも示し、さらには S. Smiles, *Self-Help*, 1859 や J. S. Mill, *On Liberty*, 1859 の訳書を、それぞれ『西国立志編』、『自由之理』の名で訳述刊行した人物である。『西国立志編』は福澤諭吉『学問のすずめ』と並ぶ明治期の大ベストセラーであった。ここに、福澤らと共に日本初の学術団体と言われる明六社を結成して活躍したこと、『教育勅語』の原案作成を依頼され執筆したことなどを加えても良い。

以上のようなプロフィールからすれば、中村正直の重要性は明らかであったが、大久保健晴「明治エンライトンメントと中村正直(一)——『自由之理』と『西学一斑』の間」(『東京都立大学法学会雑誌』三九卷一号・二号)や、李セボン「『道』と『教』——阪谷素と中村正直」(河野有理編『近代日本政治思想史』ナカニシヤ出版、二〇一四年)のような優れた研究成果が発表されてはきたものの、近年の明治思想史研究の水準で為される単著による総合的な中村研究の登場は待ち望まれている。近年の研究では、「啓蒙」というイメージで明治思想を捉えることとの問題性や、明治思想に影響を与えた西洋思想並びに儒学、国学に代表される伝統思想の多様性も明らかになるなど、丸山

眞男以来の近代思想研究の枠組みを無批判に踏襲することはもはや許されなくなっている。「西洋思想の影響があり……」とか「儒学の発想が残存し……」といった大雑把な物言いも為されなくなってきたし、福澤諭吉のみを排他的に評価するという姿勢も見直されてきた。徐々に進められてきた明治思想イメージの書き換えが、本書によって、さらなる洗練度を加えて為されることになった。

本書の特徴は、中村正直という人物を徹底して内在的に理解しようとする姿勢にある。著者は、〈儒学からキリスト教へ〉という一般化している中村イメージに依拠することなく、中村が用いる語の出典を徹底的に追求することを通じ、キリスト教に依拠しているように見える議論であっても、実は儒学的に思考していた中村の姿を明瞭に浮かび上がらせている。しかもまた、中村の基底にあった思想を儒学として一口に括るのではなく、その多様性まで含めて復元されている。昌平坂学問所の御儒者として、中村はもちろん、朱子学の影響を強く受けていた。中村が行う様々な政策論や具体的な判断において、朱子学的な発想こそがベースにあったのは当然である。本書でも、例えば、「統治者による制度の改革によって理想の統治状態に到達できると主張した」「荻生徂徠的な思考方法とは明らかに異なるものとして中村の発想が説明され、「人間の根本的な『性質』の『改造』によってのみ真の「一新」を成就できるという中村の思想は明らかに朱熹に近く」、「徂徠のそれとは対極にあつ

た」とされている(一三四頁)。しかし他方、中村の思想の重要部分を形作るものとして分析される「天」観念を論じる際には、中村は先秦時代の儒学文献、『詩経』や『書経』を論拠として多用し、朱子学に対してはむしろ批判的な眼差しを向けていたと著者は指摘する(二二頁)。以上のような丁寧な読解を通じ、キリスト教への関心を示し『西国立志編』や『自由之理』を翻訳出版したという意味では洋学者であった中村を「儒者であるにも拘わらず」として理解してきた先行研究を却け、著者は「儒者だからこそ」のこととして提示することに成功している。中村は、儒者だからこそ、そして儒者として、西洋に関心を持ち洗礼を受けさせたのである。

二

従来の中村研究は、『西国立志編』、『自由之理』を翻訳出版し、キリスト教に対する強い関心を示したという、いわゆる「明治啓蒙思想家」としての中村に注目してきた。しかし、明治前期の思想家達に自らを「啓蒙思想家」と捉える自意識はなかったことが明らかになっている。「啓蒙」思想としての価値を査定するという視点は、中村研究においても的外れなものである(一三頁)。「明治啓蒙思想」も「洋学」も、中村の思想を捉える上では外在的なキーワードに過ぎない。著者が中村を見る際に重視するのは、あくまでも「儒学」である。本書は、「中村の学問的な基底をなし、終生、変わることなく思想の拠

り所となっていた儒学の文脈を重視しつつ、彼の問題関心の再構成を試みる」(九頁)ものである。

例えば、著者が注目する「留学奉願候存寄書付」には、儒者だからこそ洋学を学習すべきとする留学希望理由が記されている。中村によれば、外国の政治や風俗、言語、学術を学ぶことは、まさに儒者の職分であり、それは「格物致知」という朱子学における学問、修養の実践であった。かつて日本の儒学者が中国や朝鮮に関心を持ったのと同じように、今の儒学者は洋学やキリスト教に関心を持ち洋書を読むべきだというのである。このような中村自身の発想を前提にするならば、『自由論』の翻訳も、キリスト教への関心も、あくまでも儒学に依拠した中村自身の思想として分析されなければならない。原著である『自由論』であれキリスト教であれ、正解として設定される外在的な基準への到達度を判定するような姿勢では、中村自身の思想を内在的に把握することができないからである。

キリスト教への傾倒を示すものとして捉えられてきた「敬天」という発想も、儒学者故の発想であったという。「天」という超越的な存在に対する「敬」があればこそ、人間世界における規範が成り立つと中村は考える。それは確かに「天即理」という発想を明確に否定するなど、朱子学的なものではなかった(一二三頁)。「天」は外在的かつ超越的なものとして理解されており、だからこそ「儒学からキリスト教へ」という位相で捉えられ、その上で、三位一体や原罪に対する眼差し、キ

リスト論を欠いているなどとしてキリスト教理解の不十分さが強調されてきた。しかし中村における「敬天」は、朱子学以前の「天」観念が念頭に置かれた儒学思想として捉えるべきものであり、キリスト教理解としての正当性という議論は、そもそもの問題設定自体が的外れだという。著者によれば、「理」ではなく「天」「上帝」を重視し、その超越性を強調する姿勢は、李退溪、丁茶山ら、朝鮮の儒学者にも見られるものであり、儒学者にとつて十分にあり得る「天」理解であった。第四章、第五章で詳しく分析される『西国立志編』『自由之理』も、それ以前に著されていた中村自身の「敬天愛人説」、「請質所聞」における、少数の治者による統治ではなく「民人」自らの修養に基づく自治を目指すべきだとする議論の延長上に理解されている。『西国立志編』も『自由之理』も、中村自身の内にある儒学的な発想を深化させた思想作品として理解すべきものである。例え、単なる翻訳書として捉えるのは誤りだというのである。例えば、『西国立志編』において、キリスト教を基礎に描き出される「自主」の人格は、朱子学の「修養」に励む人間像に読み替えられ「敬天」の思想で裏付けられている。もちろんそれは、従来の儒学的発想そのままというわけではない。儒学においては統治の対象とされる「民」自身が奮起し、国をより良き状態へと押し進めるとする「民」の「活潑」さを目の当たりにしたイギリス留学経験も影響し(七五頁)、天の外在性・超越性を前提にして、統治者と被治者との区別を取り除いた互酬的な人

間関係に着目し、人と人との間における道徳を導き出したという点に中村の特徴があると指摘される（八六頁）。君主の役割が限定的に捉えられ、「自主」の精神に富んだ「民人」の主体性が強調されるようになっていく点に、朱子学や徳川日本の秩序観との相違、西洋との邂逅の意味があったという（一五三頁）。

三

洋学に関心を持ち、訳書も刊行し、さらにはキリスト教の洗礼も受け、それでいながら、終生儒学者としての自意識に変容がないという中村の思想は、折衷的という曖昧な表現で処理されたり、本人とは無縁の外在的な基準に基づいた限界を指摘することが容易な対象でもあり、それによって一通りの説明が為されたことになってきた。福澤諭吉と比べ、「不完全」な「啓蒙」思想家として低く評価され、その存在感が薄れていったのはそのためであった（二三頁）。それに対して本書は、中村正直の思想を徹底して内在的に捉えた本格的な研究書であり、そのような中村正直理解を根底から覆そうとした労作である。

しかし、中村正直研究としての意義が明らかな一方で、近代日本思想研究として本書がどのような意義を持ち得るかについての著者の筆致は極めて禁欲的である。本書が探り当てた中村の思想は、明治思想理解に何をもたらし得るのだろうか。必ずしも明快に論じられていない点に歯がゆい読後感が残ることは否めない。そこには、先行研究との関係で、中村が終生儒学者

であったという側面にこそ注力すべきだという論述戦略が関係していることだろう。周到で着実な分析が求められる学位論文が基になっているという事情もあったかもしれない。中村正直を内在的に捉え直すことが本書における優先課題であったということとは了解可能である。そのことを分かった上でなお、歯がゆい読後感について考えてみたい。

儒学の教養を有する洋学者という共通項を持つ思想家として、例えば西周は、中村と共通する語彙を用いて思想を展開していた。西もまた、中村と同様、規範が成り立ち得ることを証明するために、「理」や「天」といった用語を用いた考察をめぐらすが、その結論は、中村とはだいぶ違ったものになっているように思える。両者を比較した時に、中村の結論はどのように分析できるだろうか。あるいはまた、著者自身がこれまでに研究してきた阪谷素と比較した時に、中村の思想はどのように捉えられるのだろうか。阪谷こそは、洋学の素養に欠けるが故に、徹底して儒学的に思考していた思想家であった。

著者もまた、そのような問題に関心がなかったわけではないように思う。例えば著者は、強弱・優劣を競うことへの儒学的な拒否反応に基づき、正しい「品行」と「風俗」の重要性を強調する中村の思想を捉える際、「福沢諭吉が英語の competition の訳語として「競争」を用いた時に幕府の要人が「争」の字を「穏やかでない」という理由で彼を咎めたという有名な逸話」に言及している（一四四頁）。「天」を源泉とする価値は絶対

的なものである以上、「争」に意味はない、そう著者は中村の主張を要約する。「争」は相対的な価値の追求に過ぎないからである。重要なのは、正しい「品行」と「風俗」である。他方の福澤は、「競争」に価値を見出し、時に必要以上とも言えるほどに論争に邁進し、そのための「演説」の普及にも尽力した。「競争」こそは、社会を進歩させるための重要な精神だと福澤は考えていた。そのことを分かった上でなお、しかし著者は、「中村が『無所争子』『無所争翁』という号を用い、その書齋を『無所争斎と名付けた』のは儒学的な背景に起因する」とだけ述べ、中村と福澤とを比較して論じようとしないのである。

あるいはまた、著者は『西国立志編』や『自由之理』における中村の「自由」理解と、『学問のすゝめ』や『文明論之概略』における福澤の「自由」理解との間には思想的な一致が存在したと述べる（一六八頁）。しかし、そう述べる箇所が付された注では、松田宏一郎「福澤論吉と明治国家」（『日本思想史講座4——近代』ペリカン社、二〇一三年）がひかれ、明治十年代以降の福澤が国家による介入と操作なしには人々を政治社会の問題関心に動機付ける「気力」が失われたと考えるようになっていったことが適切に指摘されている。福澤はその後、人心収攬のための装置に関心を寄せるようになっていく。両者の一致を主張できるのは、福澤の主張のごく一部分のみを切り取った場合のみ可能なことであることは、著者も了解済みのことであった。そもそも、宗教一般に偽善的なものを嗅ぎ取ろうとする

傾向を持つ福澤と中村との間にはかなりの距離が存在すると言わなければならない。他方、明治十年代以降の福澤が「自治」に言及するようになっていくという点では、「自主」の精神に富んだ「民人」の主体性を強調する中村の議論との比較が成り立つ。もちろん、例えば、国民一般の素因として自治の習慣があったとする戦略的議論を展開した「国会の前途」における福澤の主張と、「自主」の精神に富んだ「民人」の主体性を強調しつつも、現実の「民人」をそのような「民人」へと「改造」するための教化の問題にも大きな力点を置いていた中村の発想との間に存在する距離は小さくない。その距離はどう分析できるだろうか。

中村を儒学者として理解し、「天」へのこだわりを跡付けるという本書の作業は、著者の強調にもかかわらず、単なる古き、近代思想への過渡的な思想として読まれかねない。「天」のような普遍主義的観念の意義を論じるには、もう一手間かけた議論が必要であろう。読者の共感を前提にして中村における「天」へのこだわりが了解され得ると考えるわけにはいくまい。丸山が「開国」を著した頃とは時代状況が大きく異なっている。本書が明らかにした中村の思想を明治思想全体の中に位置づけ、同時代の思想家との比較を踏まえた時、どのようなことが言い得るのか。この問題は、近代日本思想研究そのものに突きつけられた課題として共有されていくことになるだろう。

（専修大学教授）